

# 1 微分

$f(x)$  を  $\mathbb{R}$  の開集合  $D$  で全微分可能な関数とすると, 任意の  $a \in D$  に対して,

$$f(a+h) - f(a) = f'(a)h + o(h) \quad (h \rightarrow 0)$$

となります. ただし,  $o(h)$  は Landau の記号で,  $\lim_{h \rightarrow 0} \frac{o(h)}{h} = 0$  です. このとき

$$df = f'(x)h \quad (1)$$

を  $f$  の微分といいます.

$f(x)$  が定数関数ならば,  $df = 0$  になります.

$x$  を独立変数とするとき,  $f(x) = x$  とすれば,

$$f' = 1$$

となるので  $f = x$  の微分は

$$dx = 1 \cdot h = h$$

となります. これを式 (1) に代入すると  $f$  の微分は

$$df = f'(x)dx \quad (2)$$

と表されます.

$x$  が従属変数の場合にも, 微分  $df$  を式 (2) の形で表すことができます. そのことを主張するのが次の定理です.

**定理 1.1.**  $f(x)$  が  $x$  の関数として微分可能で,  $x = x(t)$  が  $t$  について微分可能な関数であるとき, 微分  $df$  は

$$df = f'(t)dt = f'(x)dx$$

となる.

証明.  $x$  は  $t$  の関数として微分可能であるから,

$$dx = x'(t)dt.$$

さらに, 合成関数  $f = f(x(t))$  は  $t$  の関数として微分可能であるから,

$$df = f'(t)dt$$

となる.

$$f'(t) = f'(x)x'(t)$$

であるから,

$$df = f'(x)x'(t)dt = f'(x)dx$$

となる.

□

**定理 1.2.**  $D$  で微分可能な実数値関数  $f(x), g(x)$  に対して,

(i)  $d(f+g) = df + dg$

- (ii)  $d(f - g) = df - dg$
- (iii)  $d(fg) = gdf + f dg$
- (iv)  $d\left(\frac{f}{g}\right) = \frac{gdf - f dg}{g^2}$

が成り立つ .

証明.

$$\begin{aligned}
 \text{(i)} \quad d(f + g) &= (f + g)' dx \\
 &= (f'(x) + g'(x)) dx \\
 &= f'(x) dx + g'(x) dx \\
 &= df + dg.
 \end{aligned}$$

(ii) (i) と同様 .

$$\begin{aligned}
 \text{(iii)} \quad d(fg) &= (fg)' dx \\
 &= (f'(x)g(x) + f(x)g'(x)) dx \\
 &= g(x)f'(x) dx + f(x)g'(x) dx \\
 &= gdf + f dg.
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 \text{(iv)} \quad d\left(\frac{f}{g}\right) &= \left(\frac{f}{g}\right)' dx \\
 &= \left(\frac{f'(x)g(x) - f(x)g'(x)}{g(x)^2}\right) dx \\
 &= \frac{g(x)f'(x) dx + f(x)g'(x) dx}{g(x)^2} \\
 &= \frac{gdf + f dg}{g^2}.
 \end{aligned}$$

□

$D$  において導関数  $f'(x)$  が微分可能であるとき , 微分  $df$  の微分  $d^2 f = d(df)$  を考えることができます . 実際 ,

$$\begin{aligned}
 d^2 f &= d(f'(x)dx) \\
 &= d(f'(x))dx + f'(x)d^2 x \\
 &= f''(x)dx^2 + f'(x)d^2 x
 \end{aligned}$$

となります .

$x$  が独立変数である場合 , 先に見たように  $dx = h$  となります .  $h$  は独立変数なので ,  $d^2 x = 0$  となります . したがって

$$d^2 f = f''(x)dx^2$$

となります . また一般に ,  $x$  が独立変数ならば ,  $f$  が  $n$  回微分可能であるとき

$$d^n f = f^{(n)}(x)dx^n$$

が成り立ちます .

定理 1.3.  $f(x, y)$  が  $x, y$  の関数として全微分可能で,  $x = x(t), y = y(t)$  が  $t$  について微分可能な関数であるとき, 微分  $df$  は

$$df = f_x dx + f_y dy$$

となる.

証明.  $x$  は  $t$  の関数として微分可能であるから,

$$dx = x'(t)dt.$$

同様に,  $y$  は  $t$  の関数として微分可能であるから,

$$dy = y'(t)dt.$$

さらに, 合成関数  $f = f(x(t), y(t))$  は  $t$  の関数として微分可能であるから,

$$df = f'(t)dt$$

となる.

$$f'(t) = f_x(x, y)x'(t) + f_y(x, y)y'(t)$$

であるから,

$$\begin{aligned} df &= (f_x(x, y)x'(t) + f_y(x, y)y'(t))dt \\ &= f_x(x, y)x'(t)dt + f_y(x, y)y'(t)dt \\ &= f_x dx + f_y dy \end{aligned}$$

となる.

□

記号を上の定理の通りとし, さらに  $f_x(x, y), f_y(x, y)$  が全微分可能であって,  $x'(t), y'(t)$  が  $t$  について微分可能であるとき,

$$\begin{aligned} d^2f &= d(df) = d(f_x dx + f_y dy) \\ &= d(f_x)dx + f_x d(dx) + d(f_y)dy + f_y d(dy) \\ &= (f_{xx}dx + f_{xy}dy)dx + f_x d^2x + (f_{yx}dx + f_{yy}dy)dy + f_y d^2y \\ &= f_{xx}dx^2 + 2f_{xy}dxdy + f_{yy}dy^2 + f_x d^2x + f_y d^2y \end{aligned}$$

となります. 両辺を  $dt^2$  で割ると,  $\frac{d^2f}{dt^2}$  の公式が得られます.

## 2 全微分

$f(x, y)$  を  $\mathbb{R}^2$  の開集合  $D$  で全微分可能な関数とすると, 任意の  $(a, b) \in D$  に対して,

$$f(a + h, b + k) - f(a, b) = f_x(a, b)h + f_y(a, b)k + o(\rho) \quad (\rho \rightarrow 0)$$

となります. ただし,  $\rho = \sqrt{h^2 + k^2}$  です. また,  $o(\rho)$  は Landau の記号で,  $\lim_{\rho \rightarrow 0} \frac{o(\rho)}{\rho} = 0$  です. このとき,

$$df = f_x h + f_y k \tag{3}$$

を  $f$  の全微分といいます。

$f(x, y)$  が定数関数ならば,  $df = 0$  になります。

いま,  $x, y$  は独立変数であるとします。 $f(x, y) = x$  のとき,

$$f_x = 1, \quad f_y = 0$$

となるので,  $f = x$  の全微分は

$$dx = 1 \cdot h + 0 \cdot k = h$$

となります。同様にして,  $f = y$  の全微分は  $dy = k$  となります。

これら  $dx = h, dy = k$  を式 (3) に代入すると,  $f$  の全微分は

$$df = f_x dx + f_y dy \quad (4)$$

と表されます。

$x, y$  が従属変数である場合にも, 全微分  $df$  を式 (4) の形で表すことができます。そのことを主張するのが次の定理です。

**定理 2.1.**  $f(x, y)$  が  $x, y$  の関数として全微分可能で,  $x = x(u, v), y = y(u, v)$  が  $u, v$  の全微分可能な関数であるとき,

$$df = f_u du + f_v dv = f_x dx + f_y dy$$

が成り立つ。

証明.  $x$  は  $u, v$  の関数として全微分可能であるから,

$$dx = x_u du + x_v dv.$$

同様に,  $y$  は  $u, v$  の関数として全微分可能であるから,

$$dy = y_u du + y_v dv.$$

さらに, 合成関数  $f = f(x(u, v), y(u, v))$  は  $u, v$  の関数として全微分可能であるから,

$$df = f_u du + f_v dv$$

となる。

$$f_u = f_x x_u + f_y y_u, \quad f_v = f_x x_v + f_y y_v$$

であるから,

$$\begin{aligned} df &= (f_x x_u + f_y y_u) du + (f_x x_v + f_y y_v) dv \\ &= f_x (x_u du + x_v dv) + f_y (y_u du + y_v dv) \\ &= f_x dx + f_y dy \end{aligned}$$

となる。

□

**定理 2.2.**  $D$  で全微分可能な実数値関数  $f(x, y), g(x, y)$  に対して,

- (i)  $d(f + g) = df + dg$
- (ii)  $d(f - g) = df - dg$

$$(iii) \quad d(fg) = gdf + f dg$$

$$(iv) \quad d\left(\frac{f}{g}\right) = \frac{gdf - f dg}{g^2}$$

が成り立つ。

証明。

$$\begin{aligned} (i) \quad d(f+g) &= (f+g)_x dx + (f+g)_y dy \\ &= (f_x + g_x)dx + (f_y + g_y)dy \\ &= (f_x dx + f_y dy) + (g_x dx + g_y dy) \\ &= df + dg. \end{aligned}$$

(ii) (i) と同様。

$$\begin{aligned} (iii) \quad d(fg) &= (fg)_x dx + (fg)_y dy \\ &= (f_x g + fg_x)dx + (f_y g + fg_y)dy \\ &= (f_x g dx + f_y g dy) + (fg_x dx + fg_y dy) \\ &= g(f_x dx + f_y dy) + f(g_x dx + g_y dy) \\ &= gdf + f dg. \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} (iv) \quad d\left(\frac{f}{g}\right) &= \left(\frac{f}{g}\right)_x dx + \left(\frac{f}{g}\right)_y dy \\ &= \left(\frac{f_x g - f g_x}{g^2}\right) dx + \left(\frac{f_y g - f g_y}{g^2}\right) dy \\ &= \frac{(f_x g dx + f_y g dy) + (fg_x dx + fg_y dy)}{g^2} \\ &= \frac{g(f_x dx + f_y dy) + f(g_x dx + g_y dy)}{g^2} \\ &= \frac{gdf + f dg}{g^2}. \end{aligned}$$

□

$D$ において偏導関数  $f_x, f_y$  が全微分可能であるとき、全微分  $df$  の全微分  $d^2 f = d(df)$  を考えることができます。実際、

$$\begin{aligned} d^2 f &= d(df) = d(f_x dx + f_y dy) \\ &= d(f_x)dx + f_x d(dx) + d(f_y)dy + f_y d(dy) \\ &= (f_{xx} dx + f_{xy} dy)dx + f_x d^2 x + (f_{yx} dx + f_{yy} dy)dy + f_y d^2 y \\ &= f_{xx} dx^2 + 2f_{xy} dx dy + f_{yy} dy^2 + f_x d^2 x + f_y d^2 y \end{aligned}$$

となります。

$x$  が独立変数の場合、先に見たように  $dx = h$  となります。 $h$  は独立変数なので、 $d^2 x = 0$  となります。同様に  $y$  が独立変数ならば  $d^2 y = 0$  となります。したがって、 $x, y$  が独立変数のとき、

$$d^2 f = f_{xx} dx^2 + 2f_{xy} dx dy + f_{yy} dy^2$$

となります。またこのとき一般に， $f$  の  $n-1$  階の偏導関数が存在して，それらがすべて全微分可能であるとき，

$$d^n f = \frac{\partial^n f}{\partial x^n} dx^n + \cdots + \binom{n}{k} \frac{\partial^n f}{\partial x^k y^{n-k}} dx^k dy^{n-k} + \cdots + \frac{\partial^n f}{\partial y^n} dy^n$$

が成り立ちます。これを

$$d^n f = \left( dx \frac{\partial}{\partial x} + dy \frac{\partial}{\partial y} \right)^n f$$

と略記します。